

## ふくいアユ 来年も熱い

### 友釣りの舞台裏

今シーズン、岐阜や愛知のアユ師が殺到した福井県内の河川。本紙のアユロードでも九頭竜川中部、足羽川、日野川、笙の川が登場。天然遡上(そじょう)に恵まれただけでなく、ほとんどの漁協の網解禁が9月になってからという友釣り師にとってはありがたいシステムが、集客の大きな引き金となった。さらに県が「ふくいアユ」ブランドとして、早期遡上魚からの海産系生産へ着手。3年計画で新たな自家ブランド生産と種苗の質向上に着手し始めた。

(柳沢研二)

### 県が3年計画で種苗の質強化策



これまで県直営の内水面総合センターが生産していた福井県産と呼ばれる人工産アユは、秋に九頭竜川の網漁で取れた親魚から採卵、ふ化させて、1シーズン池で飼育。さらに、このアユから再び、採卵、ふか化させて、次のシーズンにやっと県内の河川に放流されていた。この海産系F2が主力で3分の2。野生魚に最も近いとされるF1は3分の1にとどまっていた。漁協から「F2は追いが弱い」などの指摘があったという。岐阜や愛知ではF1が主力で立ち遅れ感は否めなかった。これまで一〇月下旬に行われる採卵がネックだったという。今年から始まったという「ふくいアユ種苗性向上技術開発事業」。内水面総合センター所長の松崎雅之さん(53)は、「3年計画で放流アユ種苗の質を高める試みです」。九頭竜川の3つの水系から今年4～5月にかけて親魚候補を特別採捕。まだ放流が行われていないエリアで、早期の遡上魚を確保したという。「秋に網で採捕したアユよりも早期遡上魚の方が友釣りに適した特性を持っているはず」と松崎さん。さらに「親魚の成育が非常に良くて、採卵が10月上旬から可能となりました。いい感触を得ています」という。来春に試験放流が行われて、従来の種苗との比較調

査を行うという。

ただ、悩みの種は飼育池の不足。センターが年間生産するアユは4難フサイズで4トッ・100万匹にとどまっている。近年、日野川漁協などが直営の中間育成池を持つようになったが、それでも県内の放流魚をまかなえない。

福井県内の総放流量は約32ト。松崎さんは「湖産が6割、福井県産2割、残りは岐阜や兵庫の海産系といったところですよ」と指摘。天然遡上河川がほとんどで、再生産が望め、遺伝的な面からも問題のない福井県産種苗のニーズは高い。「もう少し量がほしい」という漁協からの切実な声もある。

まず質を高めるために生まれた今回の試み。松崎さんは「まず自家産のF1にこだわった生産体制を早く確立したい」と力を込めた。この夏、友釣り師でにぎわった福井の河川。「ふくいアユ」は釣り人を呼び寄せることができるか。

### 海産系生きる川多い

福井県内水面総合センターが取り組んでいる「種苗性向上」。遺伝的多様性や再生産という点から、福井の天然遡上河川で親魚を採捕して、最も野生に近いF1の海産系種苗を生産するのは自然な流れ。ここ10年、冷水病に強くて良く掛かるアユをという要望で、交雑種や長期継代魚などが次々と出ては消えていった。冷水病の特効薬も開発されない今、昔の琵琶湖産のようなアユを望むのは厳しい状況だ。



全国各地の種苗生産センターも「地元の天然遡上河川から採捕した親魚から種苗生産を」というコンセプトに立ち返っているところが多い。ただ福井の場合、生産量の少なさは心細い。この海産系は初期の砥水温時には掛かりが悪い。早くて8月に入ってから活性が高まる。海産系一本に絞った日野川が8月に入ってから好調になったのがいい例だ。福井の強みは網の解禁が遅いこと。岐阜や愛知は海産系が機能し始める8月中にほとんどの河川で網が始まる。福井は盛期とも言われる9月からをにらんだ放流戦略を立てられる。生産者サイドは種苗の質を上げるとともに、いかに増産体制に向けた工夫がこれから、必要だろう。友釣り師を集客するために県内各漁協は、海産系に合わせた制度をさらに進化させる方向。つまり網の解禁を遅らせて、一気に集客を狙おうというものだ。釣り人とともに来年も注意深く見守りたい。

### 成育に合わせた「リレー方式」

アユの成育に合わせた「リレー方式」。内水面総合センターでの採卵からのアユは主に図のような流れで育てられる。松崎所長によると「淡水→海水→淡水といったアユの生活史に合わせた形で、県内の施設を移動していきます」という。

九頭竜川の五松橋下流左岸にある県内水面総合センター。県内河川に生息する魚の水檻や展示コーナーがある。水檻にはアユも泳いでいる。サクラマスやアユのコーナーが充実していて、オフにファミリーと訪れてみるのがお勧め。入場無料で月曜が休館。

## 九頭竜川中部&日野川漁協、集客へ改革断行

釣り入葉客へ客漁旋属既に動き始めている。各漁協の担当者を直撃してみた。

【九頭竜川中部】漁協始まって以来の友釣り専用区設置の評価は高かった。入川者はほぼ横ばい。岩本日出男組合長は「来年は少なくともこの専用区はキープしたい。さらに拡大する方向で理事会などで話し合います」と話していた。

【日野川】年券値下げ効果もあって、入川者は一・2倍ほどアップ。「福井県産種苗を生かすため、網の解禁をさらに2週間遅らせ、10月上旬をめどにする方向で調整したい。釣り入あつての漁協ですから」と篠田裕彦副組合長。

【足羽川】解禁ダッシュが決まり、入川者は前年比1・3倍アップ。「少なくとも現在ある専用区をキープする方向です」と漁協。

【若狭河川】ここ2年入川者は、例年の8割程度に低迷。「集客に向けて網の解禁を遅らせたり、友釣り専用区を設置しないと生き残れない。ただ、内部調整が難航しそうなので、実現は約束できない」と漁協。